

ヒト受精卵の健康状態計測装置商品化

不妊治療への効果期待

医療用機器の開発などを手掛けるベンチャー企業、クリノ(仙台市)は山形大工学部の阿部宏之教授が開発した技術を活用し、人間の受精卵の活性度を計測する装置を商品化した。髪の毛の10分の1ほどの細さのマイクロ電極を受精卵に近づけ、接触させずに呼吸量を計測する。活性度が高い受精卵を母胎に戻すことが可能になり、不妊治療で妊娠率の向上が期待できるといふ。

仙台のベンチャー「クリノ」

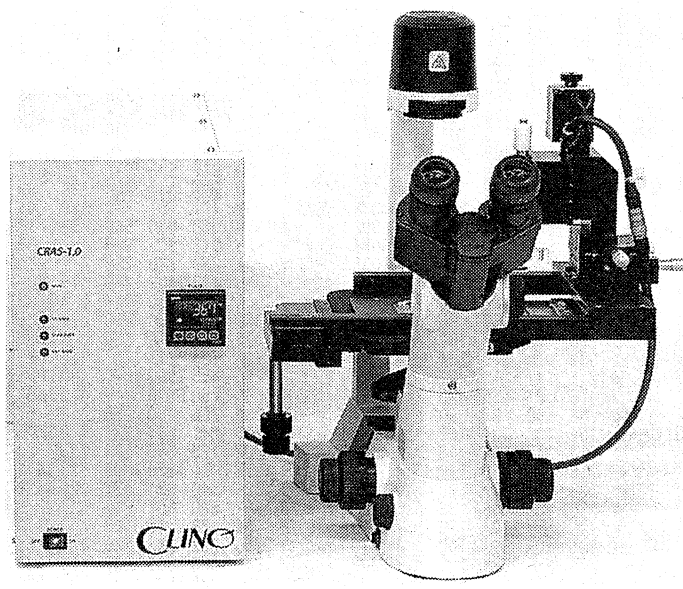
測定は、専用プレートを使って計測する方法に受精卵と測定液をセットがあるが、受精卵へのトシ、5秒の白金製マイク電極を受精卵の近くで上下動させる。同社によると、測定液内の酸素量を電気化学的に計測することで、受精卵の呼吸量を短時間に算出できる。牛の受精卵を使った移植実験では、30〜40%だった妊娠率が60%まで向上した。不妊治療を行ってきた。呼吸量は色素

を握ることなく、健康状態を客観的に把握

触れずに呼吸量把握

の試験的な臨床研究でも、妊娠率が改善したと

クリノの上木原隆社長は「市場のニーズは高い。改良の余地もあり、細胞の酸素消費量を計測するシステムのため、薬剤効果や食品鮮度の評価など幅広い分野への応用が可能。すでに医療機関や研究機関からの引き



CLINO